

2022/8/21

ヨハネの黙示録 講解メッセージ②

『ヨハネの黙示録 9章後半 一戦争の根本解決一』

☒ なぜ神はわざわいを静観するのか

「第一のわざわいは過ぎ去った。見よ。この後なお二つのわざわいが来る。第六の御使いがラッパを吹き鳴らした。すると、私は神の御前にある金の祭壇の四隅から出る声を聞いた。その声がラッパを持っている第六の御使いに言った。「大川ユーフラテスのほとりにつながれている四人の御使いを解き放せ。」(黙示録 9:12-14)

過ぎ去った第一のわざわいは、自然界における災害でした。この後、さらに二つのわざわいがやってきます。「四人の御使い」の「御使い」は「アンゲロス」という言葉で、「使者」という意味です。神からの使いであれば「御使い」ですが、この四人の御使いは地につながれている地からの使者です。神の使いではありません。

「彼らは、底知れぬ所の御使いを王にいただいている。彼の名はヘブル語でアバドンといい、ギリシヤ語でアポリュオンという。」(黙示録 9:11)

「アバドン」「アポリュオン」は、「破滅・滅び」という意味で、この「御使い」は悪魔からの使者、「滅ぼす者」を象徴しています。すなわち、「四人の御使いが解き放される」とは、地上の王が自由に活動することであり、その王たちによって、わざわいがもたらされるのです。つまり、あと二つのわざわいとは、人間がもたらすわざわいです。

ただし、彼らを解き放すのは神ではありません。人を滅ぼすわざわいは、すべて悪魔から出たものです。「解き放せ」という表現は、神がわざわいをあえて静観することを表しています。

そもそもこの世界は、悪魔によって支配されている滅びる世界であるため、様々なわざわいが起こります。神は何でもできますが、あえて何もせず、人のするがままにさせます。それは、王たちのもたらすわざわいが、人が神を求める機会になるからです。

人は、自分の力で自分の正しさや立派さを証しし、心の糧を得ようとしています。このように神を頼らない生き方が「罪」です。しかし、自分の努力ではどうすることもできない限界にぶつかって、自分の弱さを認め、私たちが「神様、助けてください」と求めるのを神は待っておられます。その時、人は神に出会うことができるのです。弱さの中に神の恵みが働くのです。

✠ 戦争というわざわい

「すると、定められた時、日、月、年のために用意されていた四人の御使いが、人類の三分の一を殺すために解き放された。」（黙示録 9:15）

「四人」というのは、「世界中」を象徴しています。また、「人類の三分の一を殺す」とは「戦争」です。神が戦争を起こしているわけではありません。死の世界で、人は戦争によって互いに殺しあってしまうという現実を示しています。

騎兵の軍勢の数は二億であった。私はその数を聞いた。私が幻の中で見た馬とそれに乗る人たちの様子はこうであった。騎兵は、火のような赤、くすぶった青、燃える硫黄の色の胸当てを着けており、馬の頭は、獅子の頭のように、口からは火と煙と硫黄とが出ていた。これらの三つの災害、すなわち、彼らの口から出ている火と煙と硫黄とのために、人類の三分の一は殺された。馬の力はその口とその尾とにあって、その尾は蛇のようであり、それに頭があって、その頭で害を加えるのである。

これらの災害によって殺されずに残った人々は、その手のわざを悔い改めないで、悪霊どもや、金、銀、銅、石、木で造られた、見ることも聞くことも歩くこともできない偶像を拝み続け、その殺人や、魔術や、不品行や、盗みを悔い改めなかった（黙示録 9:16～9:21）。

様々な武器を使い、頭脳を使って、王たちは巧妙に戦争し、多くの人々が殺されるという、戦争の様子が象徴的に書かれています。いつの時代も戦争があり、多くの人々が亡くなっています。しかし、こうした戦争を目の当たりにした人々が、自分の限界や弱さを認め、神に寄り頼む者になったのかというと、そうではありません。ここには、生き残った人たちがますます偶像を拝み、見えるものにすがって、それを神としてしまう様子が描かれています。

「その手のわざを悔い改めない」とありますが、正確に訳すと「その手のわざから神に立ち返らない」という意味です。聖書が教える「悔い改め」とは、反省することではなく、神に立ち返ることです。罪を悔いても、神に立ち返らなければ何の意味もありません。病気の者が医者に行くように、罪に気づいたら神に立ち返らなければ、罪はいやされません。

ギリシャ語には、「悔い改める」という言葉もあって、ユダがイエス様を売った場面では「悔いた」と記されています。このように、聖書は神に立ち返ることと悔い改めることを使い分けているのですが、後世の人間が「悔い改める」と訳したため、現代まで混乱が続いています。これは、ルターも指摘している問題です。

✕ なぜ人は神に立ち返ろうとしないのか

1. 人は見える安心を求めるから

この世界では神は見えません。やがて滅びる有限の世界では、動かない永遠なるものは認識できないのです。しかし、人は見える安心を求めます。それで、この世界での安心を求めて見える神を作り出し、不安から逃げようとするわけです。偶像とは、見える形に神を造ることです。なるべく立派な神を作ってみせると、人々は恐れおののいて信じるわけです。これが神に立ち返らない一つ目の理由です。

2. 人は納得を求めるから

私たちの人格を束ねているものは理性です。理性は納得を求めます。ところが、イエス・キリストが私たちに教えている福音は、まったく納得がいかないのです。

たとえば、イエス様は「信じるだけで天国に行ける」と言われました。しかし、因果関係で成り立っているこの世界では、これはまったく納得できません。この世界は、成果主義を受け入れますから、何か善い行いをすれば救われると言われたほうが納得できるのです。悪に対しては罰を受け、熱心に悔い改めるならば赦される、とか、あなたが病気になったのはあなたの罪の罰だから、苦しみから解放されたければこういう行いをしなさい、これだけのものを捧げなさいと言われたほうがよっぽど納得がいくのです。

しかし、イエス様は「あなたの罪は無条件で赦される」と言われました。キリスト教は、罪の告白を受けた段階で、「あなたの罪は赦された。もう心配しなくていい。」と教えます。これでは納得できません。

また、イエス様だけが救い主であって、ほかに救い主はいないというのも、納得いきません。人間として生まれたものが神であることも、その人が三日目によみがえることも、まったく納得がいきません。つまり、聖書の教えを理性で理解しようとするとならずきにしかたないのです。だから人々は納得のいく教えを求めて、因果関係を教えてくれるこの世の宗教に走るのです。

神と私たちの接点は、理性ではないのです。信仰です。イエス・キリストというつまずきを乗り越える方法はただ一つ、自分の理性には限界があるということを悟らなければなりません。

人間の限界を知る方法の一つは死を考えることです。どんなに頭がよくて賢くても、死を乗り越えることはできません。その先はどうなるのか、自分の理性で答えることはできません。そこで、こうすれば天国に行けるといふ、因果関係によって納得できる話を作り上げて安心しているわけですが、それらはすべて空想です。私たちは、神が造られた世界を見れば見るほど、私たちは何も知らないということに気づきます。人間がいかに無能であり、無知であるかということ、私たちは認めなければなりません。

このようにキリスト教は「信じる」ということを前提としているために、納得を求める理性に生きている私たちにしてみると、信じられない、神に立ち返ることができないとなってしまうのです。

✂ 戦争の真の解決

人が戦争をするのは、不安だからです。人が罪を犯す原因は「不安」です。つまり、不安を解決することが戦争の真の解決であり、罪の解決の答えを見つけることとなります。それは、哲学や心理学も解き明かしています。しかし、この世の学問は因果関係までしか解き明かすことはできません。不安の正体を教え、この問題を解決できるのは聖書しかありません。罪の正体とその解決を聖書から見ていきましょう。

「神である主は人に命じて仰せられた。「あなたは、園のどの木からでも思いのまま食べてよい。しかし、善悪の知識の木からは取って食べてはならない。それを取って食べる時、あなたは必ず死ぬ。」」（創世記 2:16-17）

ここに初めて「死」という言葉が登場します。私たちは「死」というと、肉体の死を想像します。しかし、「死」とは何か、まだわかっていません。聖書を読むときには、聖書の中のことばでその意味を理解する必要があります。まず、ここで初めて「死」

という言葉が出てくるということは、神が人を造られたときには「死」はなかったということなのです。

「さて蛇は、神である主が造られた野の生き物のうちで、ほかのどれよりも賢かった。蛇は女に言った。「園の木のどれからも食べてはならないと、神は本当に言われたのですか。」」（創世記 3:1 新改訳 2017）

「神はお造りになったすべてのものを見られた。見よ。それは非常に良かった。夕があり、朝があった。第六日。」（創世記 1:31）

蛇は賢い生き物であり、神に良いものとして造られたものでした。神は初めからすべてを良いものに造っておられます。その中でも特に蛇は賢く造られたのです。人が蛇を忌み嫌うようになったのは、この先の話です。

「女は蛇に言った。「わたしたちは園の木の実を食べてよいのです。しかし、園の中央にある木の実については、あなたがたはそれを食べてはいけない、それに触れてもいけない、あなたがたが死ぬといけいからだ、と神は仰せられました。」すると蛇は女に言った。「あなたがたは、決して死にません。それを食べるその時、目が開かれて、あなたがたが神のようになって善悪を知るものとなることを神は知っているのです。」そこで女が見ると、その木は食べるのに良さそうで、目に慕わしく、賢くしてくれそうで好ましかった。それで女は実を取って食べ、共にいた夫にも与えたので、夫も食べた。二人の目は開かれ、自分たちが裸であることを知った。そこで彼らは、いちじくの葉をつづり合わせて、自分たちの腰の覆いを作った。」（創世記 3:2-7）

神は、「その実を取って食べる時、あなたは必ず死ぬ」（創世記 2:17）と言われました。ですから、取って食べたときに二人に起きた変化こそが、「死」であると理解すべきです。

それまでは、「人とその妻は、ふたりとも裸であったが、互いに恥ずかしいと思わなかった」（創世記 2:25）とあります。ところが、食べた瞬間に、ふたりは、「裸であることを知り、それを隠した」というのです。これは、自分を恥ずかしいと思ったということであり、神が見えなくなったことの象徴です。今までは神と同じ世界に生きていたので神を認識し、神に愛されている自分を認識していましたが、食べたとたん

に霊的なものが認識できなくなり、肉の目だけが開かれてしまって動く世界のものしか認識できなくなってしまったことが、ここには表されているのです。

「死」とは、神が認識できないこと、つまり有限性であるということです。神を知っているのに認識できなくなり、愛を知っているのに認識できなくなったのです。これが「不安」なのです。

つまり、不安の原因は、神に愛されているのに認識できないことにあります。その不安から私たちは「こんな自分が愛されるはずがない」と、自分に対して否定的な思いを抱くようになりました。アダムとエバはいちじくの葉をつづり合わせて、自分を隠すようになったのです。これを「罪」と言います。

つまり、神を頼らないで自分の力で生きようとする、自分の力で自分の正しさを証ししようとする、これが「罪」なのです。なぜこうなってしまったのか、それは神に愛されている自分が見えないからです。これが「死」なのです。

そのために、私たちのからだは朽ちる体になりました。

「そよ風の吹くころ、彼らは、神である主が園を歩き回られる音を聞いた。それで人とその妻は、神である主の御顔を避けて、園の木の間に身を隠した。」
(創世記 3:8)

これが、神と分離してしまった人の様子です。それでも神は私たちを見捨てず、呼びかけておられることがわかります。

今もそうです。私たちは、24時間、神の声を聞いています。人はそれを良心として認識しています。しかし、それに聞き従おうとはしないで、人の目を気にして生きています。愛されている自分が見えていないので、人から愛されようとして生きています。これが承認欲求です。愛を知っているのに、愛されていることがわからなくなったために、愛を求めて生きています。そのために人に気に入られようとするのです。この生き方を「罪」と呼ぶのです。

「神である主は、人に呼びかけ、彼に言われた。「あなたはどこにいるのか。」彼は言った。『私は、あなたの足音を園の中で聞いたので、自分が裸であることを恐れて、身を隠しています。』」(創世記 3:9-10)

これが罪です。罪というのは、神抜きで生きる生き方です。つまり、私たちが覚える苦しみはすべて罪なのです。だから、神の前に自分の苦しみを言い表すことが、罪を言い表すということになります。この瞬間、彼は救われたのです。

ここまで見ると、なぜ人が戦争をするのかが見えてきます。それは、不安だからです。なぜ不安なのかというと、神に愛されている自分が見えないからです。その不安によって、私たちはどうすれば愛される者になれるのかを目指して生きるようになりました。自分の力で自分のすばらしさを誇って生きるようになりました。これを罪というのです。

つまり、アダムによって死が入り込んで、そして死が全人類に広がり、全人類が罪を犯すようになったのです。その結果、人は互いに比べ合って競い、見えるものをたくさん所有することで安心するようになったのです。しかし、最も多くのもを所有している王であっても、不安はぬぐえません。一時の安心を手に入れても、結局はむなしく、不安に戻ります。なぜなら、それらはすべて滅びに向かって動いているからです。そこで安心を手に入れるために、次から次へと安心をむさぼることを繰り返します。それが戦争をひきおこすのです。

このように聖書は今日の不安の原因を解き明かし、さらに不安の解決方法を教えています。それは、神との関係を回復し、神に愛されている自分を再び知るようになることです。これしか不安の解決はありません。

「それゆえ、ちょうど一人の人を通して罪がこの世に入り、罪を通して死が入り、まさしくそのように、すべての人たちに死が広がった。その結果、すべての人が罪を犯すようになった。」(ローマ 5:12 私訳)

私たちが罪を犯してしまう原因は、死にあります。自分自身に原因があるのではなく、死に原因があるのです。これは重要なことです。だから聖書は一貫して私たちの罪を病気として扱い、その病をいやすために神はこの地上に来られたのです。

罪の原因が死にあることを、多くの人には知りません。イエス・キリストの時代もそうでした。罪とは、律法が入り込んだために犯すようになったのだと考えられていました。律法がなければ罪は生じないと思われていたのです。確かにその通りです。法律がなければ、誰もさばかれません。しかし、この考え方は間違っています。

というのは、律法が与えられるまでの時期にも罪は世にあったからです。しかし罪は、何かの律法がなければ、認められないものです。

「ところが死は、アダムからモーセまでの間も、アダムの違反と同じようには罪を犯さなかった人々をさえ支配しました。アダムはきたるべき方のひな型です。」(ローマ 5:13-14)

律法が与えられる前から罪は存在しました。律法が与えられたのはモーセの時です。しかし、それ以前の人であるカインはアベルを殺しました。モーセが律法を持ってくるまでの間にも、頻繁に争いが起こりました。それは、死が入り込んだからです。

アダムを通して死が全人類を支配したように、また一人の人を通して、救いが全人類に広がるのです。それがイエス・キリストです。

「律法が入って来たのは、違反が増し加わるためです。しかし、罪の増し加わるところには、恵みも満ちあふれました。それは、罪が死によって支配したように、恵みが、私たちの主イエス・キリストにより、義の賜物によって支配し、永遠のいのちを得させるためなのです。」(ローマ 5:20-21)

死が入り込んだことによって、罪は人を支配するようになりました。神が人を静観するのは、罪が明らかになるためです。神は、その罪を無条件で赦されます。

あなたを苦しめている罪は、後から入り込んできた死が原因で生まれた病気です。イエス・キリストは、それを癒すために来られたのです。つまり、死を滅ぼし、罪を取り除くために来られました。そのために、十字架にかかり、死を持ち込んだ悪魔を滅ぼし、人との関係を回復してくださいました。信じる者は、神の義を持っています。その時、神が命じたことは、「あなたの罪を言い表しなさい。」ということです。そのために、神は私たちを責めるのです。「汝の敵を愛せよ」と言われても、できないことに気づくということは、罪を認めるということです。ただし、神はそれをすべて赦してくださいます。罪を責めるのは、赦すためです。

このとき、人は、こんな罪深い私が神に愛され受け入れられていると知り、愛されている自分に再び気づくようになります。この愛を体験する時、私たちを苦しめていた不安が取り除かれ、神との関係を取り戻すことができるのです。ここに戦争の真の解決があります。

神に愛されている自分がわからなくなったことで不安が始まり、私たちは罪を犯すようになり、戦争も生まれました。ですから、その解決は、見えるものではなく、神に愛されている自分を知るしかないのです。

罪を言い表すということで、一つ注意しなければならないことは、私たちが覚える苦しみはすべて罪だということです。罪とは死です。死とは否定です。神は肯定です。神の肯定を否定する、この運動が苦しみです。苦しみを覚えたということは、罪を覚えたということなのです。

ですから、苦しみを覚えたら、それを神に言い表すことが、罪を言い表していることとなります。すると神は、その苦しみに対して、「大丈夫だから。私があなただを支えるから。」と仰ってくださるのです。絶対に責めません。

アダムが最初にした罪の告白は何だったのでしょうか。「私は裸なので、恐れて隠れました」それだけです。その告白によって神はアダムに皮の衣を着せてくださったのです。一番知っておかなくてはならないこと、それは、神はあなたを愛しておられるということです。それを見えなくさせているのが死であって、不安の原因です。

自分の苦しみを神に言い表しましょう。すると神は答え、励まし、弁護して下さいます。こうして神に愛されている自分を知る経験を繰り返すのです。自分の弱さ、苦しみ、罪に出会うたびに、神に助けを乞い、こうして神の助けを受け取ることを繰り返す中で不安が取り除かれ、癒され、力を得ます。これが戦争の解決です。神が私たちの苦しみを静観なさるのは、それが私たちと神を結ぶ唯一の窓口になるからです。